

在宅血液透析（HHD）普及のために～小数患者でも継続する意義～

長崎腎病院

○佐藤泰崇 田賀農恵 植木秀一 中山美季 羽田鮎子 林田征俊 久保純子
白井美千代 丸山祐子 原田孝司 船越 哲

【背景】

当院では、2006年よりHHDに取り組んでおり、2014年までの9年間、1名のみであったが、現在は10名程度まで増加している。

【目的】

当院でHHD普及が停滞していた理由を検討し、その後の増加にどう繋がったかを解析する。

【対象・方法】

当院でHHDの妨げとなる理由を、外来血液透析患者に1999年と2015年のアンケート調査で比較した。また、2015年に立ち上げたHHD推進チームで適応基準を作成し、これに合致すると判断した56名について調査した。加えて、2015年に職員に対する調査を行った。

【結果】

HHD導入の妨げとなっている理由は、全患者で年次にかかわらず自己穿刺が上位であったが、HHD適応基準に合致していると判断した患者では、「介助者不在」や「現状の施設透析に不自由を感じていない」が上位であり、自己穿刺や事故などの不安や心配は下位に留まった。また職員への調査にてHHDに対する関心の低さが分かった為、HHDを病院全体の年間目標として職員に啓発したことで、HHD導入患者は急増した。

【考察】

小数でもHHD患者を維持することは、患者と職員の両者にHHDという存在を認知させる素地となり、患者数増加に繋がると考えられる。